

“園舎全体が遊びの場”をめざして
～「やってみよう！」「やってみたい！」につながる保育環境～

発表者 妹尾 瑞菜(こども園かける)
指導助言者 萬井博行(よろい環境計画事務所長)
司会者 米澤 麻美(こども園かける)
記録者 澤田 羅夢(こども園かける)

1 発表の概要

(1) 主題設定の理由

本園は、「創発」を基本理念とし、「自立・共感・探究」を教育・保育の目標に掲げ、令和4年に幼稚園から幼保連携認定こども園へ移行した。

新園舎の建設にあたっては

○前庭 森の中に巨大砂場(ミニ砂丘)と小川(ミニ千代川)+ビオトープ(ミニ湖山池)

○既存遊具は設置せず「園舎全体を遊具に、遊具は自ら考え創り出す」

を基本コンセプトに掲げ、「新園舎の」建て替えを行った。

開園当初より、「目指す子ども像」を実現するための環境構成について継続的に研究してきたが、これからの空間を十分に活かしきれず、遊びの広がりや子どもの探究心にうまく結びつかない場面もあった。そこで改めて、保育者の願いと設計者の思いを融合させながら、遊びの空間づくりに焦点をあて、環境構成の見直しを図ることとした。

今回は特に、本園の特長である前庭(地上園庭)と屋上園庭という二つの屋外空間に加え、それらの建築的コンセプトを各保育室・バルコニー・廊下等にも反映させ、園舎全体が遊びの場となるよう環境が一体的に設計されている点に着目したい。それぞれの空間がつながり合い、子どもたちが園舎全体を自由に行き来しながら「やってみよう！」「やってみたい！」という気持ちを自然に引き出せるような保育環境づくりを目指していく。

(2) 取り組みについて

どのように共通の目標や保育観を築いていくのかが課題となっている。そこで本園では建築士の萬井先生にもご協力いただき、昨年度から園内研修を重ねながら、保育者が共通の方向性を持てるよう取り組んできた。その中で保育者の願いと設計士の想いを融合させながら「遊びの空間作り」に焦点をあて、環境構成の見直しを図ることにした。この際、大きなコンセプトとして「園舎全体が遊びの場になる」ことを掲げた。園舎すべてが繋がりであるという視点にたち、改めて環境認識をもって保育に取り組むことにした。まずは、保育者の中で目標設定を明確にした。一つ目は、園舎内外を一体化した遊びの環境づくり。二つ目は、やってみよう！と思える子どもの姿の実現である。

(3) 実践例

まずは三歳児クラスの実践例として、新聞紙遊びから自然と海のイメージが広がった。新聞紙遊びをきっかけに海をイメージする子が多くいたことから、保育者同士で話し合い、次の活動に繋げていった。製作では子どもたちは想像力を膨らませ、海の生き物を作り、参観日で保護者の方とお魚遊びを楽しんだ。また、かにっこ館に行き、自分の目で実際に確かめることで興味を深めることができた。他にもICT教材を取り入れ、子どもたちが描いたり塗ったりした絵をテレビ画面に映したり、製作物を飾って部屋全体を水族館のような空間にした。こうして子どもたちの興味を広げることができた。

次は、四歳児クラスの実践例である。このクラスでは忍者ごっこが自然と広まっていた。子どもたちと話し合って遊びを広げていきたいという保育者同士の想いがあり、サークルトークを行った。そこで忍者屋敷づくりをすることになり、場所探しから始め、場所が決まると早速屋敷づくりを始めた。子どもたちはテラスの階段下に新聞紙をつかって作ったが、次の日、雨や風で壊れてしまっ

ていた。再びサークルトークをして、どうしたら丈夫にできるか、壊れないかを子どもたち同士で話し合った。この時保育者は、子どもの言葉に耳を傾けること、必要以上に先回りしないこと、待つ・問い合わせることを大切に関わった。環境構成については、素材を置く位置、子どもの動線を妨げないこと、何もない空間を大切にした。子どもたちは素材を変えて布を使うことにして、工夫を重ね、納得のいく忍者屋敷を完成することができた。

子どもたちが興味関心をもつことから遊びが広がり、保育者がそれをうまくサポートすることで主体的な活動へと広がった。

(4) 反省と考察

今回の研究を通して気づいたことが三つある。まず一つ目は、保育の引き出しを増やすことである。保育者自身のアイディアや視野が広がったことで今まで気づけなかったことに気づくことができたり、それが子どもの遊びの広がりに繋がったりすることを感じた。保育者同士の連携が高まることで、より保育の引き出しを増やすことに繋がってきている。二つ目は、失敗が学びにつながり、次の保育に活かされることである。うまくいかなかった経験も大切な学びと捉え、次への改善や新しい工夫に繋がる前向きな姿勢が保育者の中から生まれた。三つ目は、日々の保育を楽しむことである。保育者自身が楽しみながら日々の保育に取り組むことで、その楽しさが子どもにも伝わり、保育全体が豊かになることに気づいた。今まで見守り重視の保育をやりがちだったが、保育者が参加しながら一緒に遊びこむことを意識していくことで、その活動の楽しさを保育者自身が感じることができたり、その喜びが子どもにもつながってきている。

これまでの実践を通して子どもたちは、空間の中で自由に動き、自ら選び、考え、関わる姿が多く見られた。「やってみたい」という気持ちが行動につながっている場面が数多くあった。園舎全体を一体化した遊びの空間と捉えることで、子どもたちの主体性や創造性がより豊かに育まれていると感じる。これらのことから、大人も子どもも「やってみたい」という気持ちを引き出すことにつながったという成果があった。これからも変化し続ける園として、よりよい園づくりを目指していきたい。

2 研究討議

(1)発表内容に対する質疑応答

Q. 川や池の水について

A. 普段は井戸水を池や川に流しっぱなしで利用している。こども園ではプールだったり、池があつたりして水をたくさん使っている。冬には雪が降ったり、夏には猛暑日が続くため井戸水を使うことによってエアコンの負荷を減らしている。そして、屋根に散水することにより、建物の熱を防ぐ効果がある。また、井戸水はランニングコストが安いため利用しやすい。

Q. 井戸水の衛生面、プールの活用について

A. プールは屋上にあり、夏に3歳児、4歳児、5歳児が利用している。1歳児、2歳児はプールに入れないので、前庭にある池や川を水遊びとして利用している。

井戸水は不純物が多いため井戸水を掘るときに、水質調査をして不純物がないところまで掘っている。そのため水質はきれいである。プールには衛生面上塩素が入っているのだが、井戸水と混ざると何かの物質が反応して色がでてしまうことが今後の課題である。

(2)全体討議

グループワーク～こども園かけるの園舎で楽しめる遊びについて、萬井先生からの助言～

【2歳児前廊下】

廊下に線路を作り電車ごっこ、木の影を利用してピクニックごっこ、サーキット遊び、紙飛行機、落ち葉製作、ボール投げ、風鈴をぶら下げて音を楽しむ、壁を利用してピタゴラ装置

・広くとって多目的として使う。

・ガラス面が多くなるように設計し、保育室の光が入って暗くならないようにしている。また、廊

下の壁材や床材を明るい素材にして入ってきた光がなるべく膨らむように工夫されている。

・ピタゴラ装置や線路をつくって電車ごっこなど、壁を使って立体的に遊んだり、廊下の長さを利用した遊びがよい発想だと思った。

・園舎内に入った時に木があることで陰影ができ、無機質な空間にならないところがよいと思う。

【前庭】

山、トンネル、池で亀や鯉の飼育、ハンモック、畠、東屋、遊具(ブランコ、上り棒など)

・危険性を配慮することで設置できるものが限られるが運動できる立体的な遊具だったり、休憩できる場所を作れたらおもしろいと思う。

【屋上】

ボルダリング、ログハウス、ピクニックごっこ、三輪車

・何も置かないことで思い切り身体を動かすことができ、遊びを自由に展開できるようにしている。

・冬に雪遊びをしたり、お泊り保育で星を見たり、夕涼み会で盆踊りをしたりなど、季節や行事で使い分ける。

【テラス】

景色を観察して描く、ひなたぼっこ、影の観察、夏祭り(色水ジュース、屋台の製作など)

・ルーバーを設置することで日差しや風の通りをコントロールしている。また、ルーバーの高さを変えることで自然をイメージしている。

【多目的の階段】

すべり台を季節のトンネルにする、ひな壇を使って演奏会や写真屋さんごっこ、滑り台に縄をはってレスキューごっこ、階段を机にして遊ぶ

・子どもたちが座れるような高さの階段になっている。

・階段横の壁に子どもたちの製作を飾ると華やかになりそう。

3 指導助言（全体まとめ）

幼稚園や保育園の設計で楽しいことをしようとすると子どもたちの学習や学びになるが、怪我のリスクや危険性がでてくる。そこをどういう風に協議するかが難しい。今日でてきたいろんな発想を今後の保育に活かしてほしい。

今後の課題は、保護者と保育者が情報共有できる場所と時間の確保だと思う。情報共有しやすいためにも安心感をもて、落ち着いて話ができる場所を考えていきたい。また、保育者も安心感をもてる空間づくりをしていくことが大切だ。